

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

開門まで6年長すぎる 佐賀県知事

諫早アクセスで県内漁業者、支援要請

【佐賀新聞7月4日】佐賀県内の有明海沿岸漁業者でつくる佐賀有明の会(川崎賢朗会長)は3日、古川康知事と留守茂幸県議会議長に、諫早湾干拓事業の早期開門に向けた支援を要請した。

川崎会長は「農水省はアクセスから開門まで6年以上かかるといっているが、漁業者はとても待てない」と指摘。長崎県側が懸念する営農や防災対策をアクセスと並行して行うことで、開門までの時間を短縮できるとし、国に早期開門に向けた要請を行うよう求めた。

古川知事は「6年以上というのは長すぎる。何のためのアクセスかという基本を踏まえ、同時にできる対策を行うよう農水省に求めている」と説明。長崎との協議についても「機会をとらえて佐賀県側の気持ちを伝えていきたい」と答えた。

農業も漁業も大事

7月13日、よみがえれ！有明訴訟原告団は、長崎県知事に對し、今月3日湛水被害に見舞われた森山地区をはじめとする諫早干拓後

有明漁民 森山地区排水不良対策要請

背地の排水不良対策に直ちに着手するよう要請した。

これまで長崎県は、諫早干拓によって後背地の排水不良対策など防災効果が発揮されるとの建前で、1982年以来、森山地区における排水機場の新設や用排水路の整備などを怠ってきた。

しかし、長崎県の資料によると、諫早干拓潮受堤防締め切り後、森山地区の湛水被害の発生回数には締め切り前と比べて約3倍に激増している。

それにもかかわらず、長崎県は、住民から「堤防のおかげで枕を高くして眠れるようになった」と聞いていると主張し、排水不良対策に取り組んでこず、森山地区住民の生命・財産を危険にさらし続けてきた。

7月3日、100ミリ程度の雨で、森山地区に湛水被害が招いてしまったことについて、長崎



県は、たまたま小潮と重なったため排水操作が困難であったと説明した。

しかし、100ミリ程度の雨が降り、それと小潮が重なることはこれからも頻繁に起こる事態であり、調整池をこのまま存続させる限り、森山地区はたびたび湛水被害に見舞われる事となる。

現に、堀江ひとみ長崎県議が出した今年2月に完成の旧川内町の排水機場に関する調査依頼に對し、長崎県農村整備課課長は「集中豪雨時には(諫早湾干拓)調整池の水位が高くなり一部湛水が生じ、畑作営農が不安定となっている。」ことを理由に排水機場を建設したことを認め、諫早干拓潮受堤防があることでかえって後背地の自然排水が阻害されていることが明らかとなった。

長崎県の開門に地元漁協が抗議

【朝日新聞7月7日】国営諫早湾干拓事業(長崎県諫早市)の調整池の北部排水門を3日に長崎県が開けた際、同県諫早湾干拓堤防管理事務所へ「すぐに閉める」と押しかけた地元の小長井町漁協の組合員らは6日、長崎県庁を訪れて「十数年ぶりの好漁だったのに、排水でアサリが死んでしまう」などと抗議した。中村法道・長崎県副知事は「堤防は防災機能も担っており、厳しい判断だった」と釈明した。漁協の組合員らが現地事務所の操作室のドアを破って侵入したことについて、新宮隆喜組合長は「抗議しても相手にしてもらえなかったから。行政の怠慢が原因だ」と話した。長崎県側は「組合長と連絡が取れなかった」と応じ、議論は平行線をたどった。他にも組合員らは「県は農業だけ助けている」などと怒号を浴びせた。今後、北部排水門を開ける基準を定めるよう県に求めていくという。一方、長崎県議会の農水経済委では、長崎県側が「想定外に雨が降り続いたが、開門のタイミングの判断が甘かったかもしれない」などと謝罪した。今回冠水した背後地の森山地区に来年度以降、排水機の整備を考えているという。

長崎県資源管理課は6日、同県諫早市・小長井港周辺や対岸の同県雲仙市瑞穂町沖など諫早湾内で、赤潮の発生を確認。関係漁協へ同夜、赤潮発生状況速報を出した。湾内での速報は昨年8月15日以来。「潮受け堤防北部排水門からの排水との関連については不明」としている。